

「人文闘争」から卒業へ

写真上3枚は10数年前に松本「あがたの森」で撮ったものだ。当時のキャンパス中央に続くヒマラヤ杉。校庭中庭を取り囲む教室。中庭は散策、集会の場であった。

講堂横の会議室には忘れられない記憶がある。ここで大学側と団体交渉していたとき、全共闘系学生により暴力的に閉じ込められた。学生自治会の役員として交渉に参加していたので、私もその一人であった。信州大「人文闘争」と呼んでいた学生運動が、この「事件」から本格化することになる。

先に紹介した信濃毎日新聞『昭和の記録』—43年7月から、東京大学全学共闘会議の学生が、安田講堂を中心として全学的な封鎖をつづけていた。43年後半からは全国的に大学紛争が激しくなっていた。この年は長野県でも、大学と高校の学園紛争が吹きあれた年であった。

人文学部も講堂から正門へと封鎖がつづき、キャンパスで講義ができなくなった。公民館などを使い、自主ゼミや講義などを行った。授業料を払っているのに、なぜキャンパスに入れないのか、正規の講義を受けられないのかと、学生の間にも不満が高まっていった。そしてキャンパス「封鎖解除」に向けて、闘いのヤマ場を迎えた。写真は『昭和の記録』によるが、懐かしい級友や私らしい姿も写っている。

信濃毎日新聞ではけが人も出た「内ゲバ」と書かれたが、キャンパスを取り戻すため多くの学生が参加した。自治会役員として、責任と重圧の毎日だった。

こうして学部2年から3年にかけて、自治会活動にのめり込んでいった。信州松本の地においても、時代の流れのなか「人文闘争」が繰り広げられた。闘いが収束に近づくと、なんだか猛烈に学問への意欲が再び湧いてきた。哲学者の渡辺義晴先生のご自宅で「資本論をドイツ語で読む会」にも参加させてもらった。渡辺先生のじつに味わい深い話に夢中になったものだ。さて、進路をどうするかで迷った。もっと勉強したいという気持ちが高まり、大学院進学を考えるようになった。渡辺先生やドイツ文学の中野和朗先生に相談して、悩みを聞いてもらった。中野先生にもお世話になった。ドイツ語への興味とともに、情熱的に語られる先生に励まされ、大学院に進もうと心に誓った。両親には学生運動にあけくれ、就職もしないことに猛反対されたが。志望する大学院として、なにはともあれ大阪市立大経営学研究科をめざした。『社会資本論』の著者、宮本憲一先生のもとで研究したかったからだ。なんとか卒業して、不安を抱え大阪に旅立った。

(2016年9月13日)

